

序

「変革期の歴史地理」とは、まことに壮大な規模の研究テーマである。しかし、一口に「変革」といつても、さまざまな種類があるだろうし、いかなる視点でみるかによって、その性格も変つてくるであらう。

過去の人文地理的事象(地表上で営まれたすべての人文現象)やその変容をとりあつかう歴史地理学の分野では四つの視点が考えられる。政治的視点、経済的視点、文化的視点、技術的視点である。「変革」もこの四つの視点から見ると、具体的となりわかりやすい。もつとも、この四つは相互に影響しあうから、現実におこった事象にはこれらが混合した状態で認識されるのが通常である。

また、変革を受容するにせよ反撥するにせよ、「変革」として受けとめるグループ(人間の集団、社会階層など)の規模や分布も千差万別であつて、そこに変革の規模や構造の変化が問題となる。

そうになると、「変革期」という用語は、いかなる視点からとりあげるにせよ、変革の規模が比較的に大きく、ある一つの時代から別の時代に移つていったという意識が後世の研究者に認識された時代ということになるのであらうか。変革期はこれまでにたくさんあつたはずであるから、その視点、規模、時代ごとにさまざまな認識ができるわけで、「変革期の歴史地理」とは何とまあ大きな

テーマを選んだものかと感心するとともに、どうやってまとめるのか心配にもなるのである。

しかし、変革期が研究者にとって面白く、そして興味関心をひく時代であることは間違いない。私は世界のどの地域にも適用できると称する発展段階史観のようなものは信用していないから、変革期を理解するには、地域の規模の大小はあるにせよ、個々の地域の具体的な事例研究を数多く行なうことが、一見迂遠にみえても、正攻法であり、間違いない方法であると思っている。変革期は、その視点、規模、時代ごとに個性があるが、同時にいくつか時代を異にする変革期、あるいは地域を異にする変革期相互の間に多くの共通性が見出されるかもしれない。

「変革期の歴史地理」を共同課題とした本書は、いまのところ、その最初のステップに上ったばかりであり、いくつかの個別研究が相互の脈絡もなく、並列されただけのものかもしれないが、「変革期」というものの認識をあらためて考えることは歴史地理学の研究にとって極めて重要なことである。本書がその意味で「変革期」を考えるきっかけとなり、体系的な「変革期の歴史地理」をつくりあげる礎石となることを期待したい。

本書の上梓に際しては、財団法人畠山文化財団から多額の助成金を賜ったことを付記し、ここに謝意を表する。

一九九〇年三月

青木栄一